

# 県中教研 社会部会だより

第 34 号

発行日 平成31年3月  
発行所 富山市千歳町1-5-1  
富山県中学校教育研究会  
編集責任者 岩田 克則  
題 字 金山 泰仁 先生

## 地域素材の教材化

主任指導主事 犀川 敏朗

本年度、各市及び地区研究大会における授業を通して、若手教員が積極的に地域素材を教材化し実践している姿をみる事ができた。

第62回中学校教育課程研究大会高岡地区では、大手コンビニエンスストアチェーンが県内で唯一展開する移動販売車を教材化した授業が行われた。教師は、企業や行政の立場から経済活動を捉える次単元の学習を見据え、利用者の立場から消費者を取り巻く諸問題を生徒に考えさせる授業を構想した。

生徒は、自分が移動販売車を利用するかどうかを明確にした後、実際のレシートや販売の様子の写真資料を手がかりに、利用者の立場や利用する理由を考え、話し合った。「家と店舗との往復が困難な高齢者」「自動車運転免許をもたない高齢者」「移動販売車を待つ時間の余裕がある人」等、生活経験を踏まえた多様な視点からの発言が続き、ねらいが見事に達成されていると感じた。

この販売方式を消費者の立場から捉えると、高齢者の生活にリズムと変化を与える、近隣住民との交流の場になるという側面がある。企業や店舗オーナーの立場から捉えると、チェーン店のイメージアップや新商品開発に関する情報収集、社会的貢献等におけるメリットが多いという側面がある。地域行政の立場から捉えると、児童生徒の見守りや高齢者支援策としての側面がある。これらの点で、この販売方式は現代社会の見方・考え方を働かせ、課題を追究したり解決したりする活動が展開できる格好の素材である。

生徒の意欲あふれる姿から、地域の具体的事例を通して学ぶことは、生徒がより主体的に課題解決に取り組むこと、地域を見直し、より愛着を深めることを再確認できた。今後、若手教員等が、地域素材の教材化に対する意欲を高め、さらなる授業力の向上が期待できる。（西部教育事務所）

## 本当に身に付けさせたい力

県部長 岩田 克則

2021年の新学習指導要領全面実施に向け、「主体的・対話的で深い学び」等の改定のキーワードを耳にする機会も増えてきたように思います。

ところで、もしも生徒から「先生の授業を受けたらどんな力が身に付くの」と問われたとき、私たち教師は自信をもって答えることができるのでしょうか。もちろん、「思考力・判断力・表現力」の育成が社会科において大切なことは誰もが理解しているところです。ただ、どうすればそうした力が身に付くのか、自分の授業で本当にそうした力が生徒に付いているのか、そもそも、思考力とはどんな力なのか、といった疑問や悩みを抱えている社会科教員は決して少なくはありません。また、「対話的な学び」を目指し、グループ活動等を取り入れはするものの、活発な意見交換がなかなかされず、本当に生徒は学んだのか疑問に感じることも多くあるのではないのでしょうか。

そうした私たちの悩みや疑問に対して、今年度、授業力向上アドバイザーの米田先生をはじめ多くの先生方から、いくつもの明快な解を与えていただきましたのでここに紹介します。

- ・「思考力」を育てるには、「比較する」「分類する」「関連付ける」などの「思考スキル」を身に付けさせることが必要である。
- ・グループ学習では、一人一人の考えがどのように更新されたかが重要になる。
- ・「対話的な学び」を成功させるには、まず「分からないから教えて」と言える生徒を育てることが重要である。

先の読めない世界において大切なのは、知識を正確に覚えることではなく、その場で必要な知識を手に入れ、有効に活用して新しい解を生み出す力だそうです。そんな社会だからこそ、私たち教師は「本当に身に付けさせたい力」について、改めて「主体的・対話的に学ぶ」必要があるのかもかもしれません。（富・速星中）

# 第 62 回 研 究

新 川 地 区

(魚・西部中)

## (1) 研究授業

魚津市立西部中学校の野坂俊彦教諭が1年歴史的分野「古代国家の歩み」の単元において、「桓武天皇はなぜ、



都を平安京に移したのだろうか」という学習課題で授業を行った。僧侶・貴族・蝦夷という3つの立場の資料を読み取ることで奈良時代の政治の様子を押さえ、それを踏まえながら、桓武天皇が遷都した理由や目指す政治像を考えさせるという授業であった。グループ発表の際に用いられたICT機器や精選された資料を効果的に取り入れることで、生徒の思考力・判断力・表現力の向上を図った。また、桓武天皇が目指した政治について仮説を立て、資料を根拠として立証していくという、従来にはない流れに挑戦した授業であった。

部会協議では、本多勝志指導主事から、生徒が



自分の考えを練り上げるための資料の選定や学習課題の設定、話し合い活動の在り方について助言をいただいた。

## (2) 研究発表

黒部市立桜井中学校の川村直弘教諭から「思考力・判断力・表現力を育てるための教材開発や学習活動はどうあればよいか」という研究主題の下に、2年地理的分野「世界と比べた日本の地域的特色 資源・エネルギー」の単元における授業実践を踏まえた提案発表が行われた。本多指導主事からは、調べたこと(根拠)と自分の意見(主張)をつなげる理由をしっかりと考えさせる活動を取り入れることは、思考力・判断力・表現力の育成に必要であるという助言をいただいた。

吉崎 正嗣(黒・鷹施中)

富 山 地 区

(富・藤ノ木中)

1年地理的分野で、竹澤暢洋教諭が「なぜ、中国は工業がさかんになったのだろうか」という学習課題で授業を行った。中国で工業化が進んだ理由について、資料を基に自分の言葉でまとめることを目標



に、生徒の発言を基に知識の構造図を完成していく授業を展開した。導入において、中国の企業がサッカーワールドカップロシア大会のスポンサーの多くを占めている実態を提示したことで、生徒が中国の工業の成長を身近に感じ、学習に意欲的に取り組むことができていた。グループ活動では、付箋をホワイトボード上で操作しながらカテゴリーごとに分類したりタイトルを付けたりするなど、協力して考える姿がみられた。部会協議Ⅰでは、松浦主任指導主事から①グループ活動では個の作業との違いを意識すること、②「根拠」と「主張」の間には「理由付け」があり、「根拠」と「理由付け」を区別した上で話し合わせること、③ホワイトボードを全体に提示し、互いのずれを明確にし、話し合う必然性をつくること等、授業の改善ポイントを助言していただいた。

部会協議Ⅱでは、富山大学人間発達科学部教授岡崎誠司先生から「『主体的・対話的で深い学び』の実現」とい



う演題で講演していただいた。①知識・概念・価値と発問・思考の関係を意識すること、②深い学びの実現には「問い」(学習課題)が鍵であり、「なぜ?」と生徒が考え、明確に分かるように設定することが大事であること、③竹澤教諭の授業について、「問い」の答えを明確に教師がもつこと、生徒が予想できる「問い」にすること、何が重要なポイントか分かるように板書を構造化すること等、具体的な指導をいただいた。

山田 智子(富・岩瀬中)

# 大会報告

高岡地区

(射・小杉中)

## (1) 研究授業

田畑悟教諭が、3年生公民分野「なぜ下村地区の住民の中には移動販売車を利用している人々がいるのだろうか?」という学習課題で授業を展開した。夏休みに調査した店舗調査の結果を基に小杉地区のお店マップで分布を確認した。また、消費活動の方法の確認や県内で唯一行われている移動販売車の様子と内容を確認した。「もしも自分なら…」と立場と条件を提示し、移動販売車を利用するかしないかを判断し理由を述べ合った。さらに、レシートやインタビューの写真資料からどのような消費者が移動販売車を利用しているかを4人班で話し合って発表した。身近にある消費活動から「消費者弱者」等の社会的現象について考え、消費者から生産者の活動へと生徒の視点を変えていった。



犀川敏朗主任指導主事からは、地域教材を取り入れたことで生徒の意欲を喚起できたこと、ねらい・課題・まとめを指導案に明記した方がよいこと、授業の視点が有効に働いたかを吟味する必要性等の助言をいただいた。

## (2) 学力向上アドバイザーによる講義

兵庫教育大学副学長米田豊先生から、「社会科における深い学びと新しい学習指導要領」と題してご講演をいただいた。参観者は、常に目標と指導と評価の一体化がなされているか、授業仮説は有効であるか等を考える必要があることや、資料の活用の際には、思考・分類・比較・関連・関係を意図的・計画的に行っていくことが生徒の思考力・判断力・表現力を高めていく上で、有効な手立てとなりうることを助言いただいた。

また、社会科における深い学びとは、主体的な学びと対話的な学びの上位概念であり、その実現のためには、知識の構造化を図ることが必要となること等の助言をいただいた。

牧野 巖 (射・小杉中)

砺波地区

(砺・庄西中)

## (1) 研究授業

畑史香教諭が、1年地理的分野「アフリカ州」の単元で、「アフリカ州の人々が貧しさで苦しんでいるのは、どのような問題点があるからか」という学習課題で授業を行った。アフリカ州の貧困に関する問題点について資料を根拠に多面的に考察し、自分の考えを深めることをねらった授業であった。



部会協議①では、「ゲストティーチャー及び映像資料の活用や、板書の構造化により、生徒は興味・関心を高め、多面的に考察していた」とする意見が出た一方、「ねらいに迫るために、資料の精選や複数の資料をつなげて考察するための問いや手立てが必要だったのでは」との意見もあった。

宮崎靖指導主事からは、学習規律の定着や教師の支援により、生徒が主体的・協働的に学習していたこと、教師がねらった内容に焦点化した課題で問うことで、具体的知識を関連付けて考察し、生徒はより主体的に追究できること等の指導助言をいただいた。

## (2) 部会協議

宮崎靖指導主事から、「知識の構造図の活用と社会科における情報活用能力の育成」と題して講話をいただいた。「情報活用能力は、学習の基盤となる資質・能力であり、すべての教科において問題解決的な学習に位置付けて育成する必要がある」との助言をいただいた。また、「知識の構造図の活用で思考の流れを具現化することで、思考力・判断力・表現力を育成する指導に活かせる。そのためには、知識の構造図と指導計画に整合性をもたせる必要がある」と、当日の研究授業指導案を例に挙げて助言をいただいた。

市川 義浩 (小・津沢中)

## 小矢部市中教研社会部会・活動報告

(5月31日：研究大会)

小矢部市中教研社会部会では、砺波市と合同で研究大会を実施している。今年度は、蟹谷中学校の松井真一郎教諭が、2年歴史的分野「近世の日本」の単元で、「島原・天草一揆は、一揆勢にとってどのような一揆であったか」という学習課題で授業を行った。中心資料『島原陣図屏風・戦闘図』を一揆勢の視点から捉え、既習事項を生かして、島原・天草一揆を多面的・多角的に考察することをねらった授業だった。

導入から課題の提示まで、多くの資料をスムーズに提示したことで、生徒の興味を喚起し、島原・天草一揆への関心を高めていた。



その後、「島原陣図屏風・戦闘図」を研究している大学の准教授をゲストティーチャーとし、スカイプを用いた対話を行った。そして、資料の詳しい解説を聞いたり、生徒の資料の読み取りを評価してもらったりする場面を設定した。ゲストティーチャーとの対話は本時だけでなく、事前の教師による授業づくりや、生徒による資料読み取りの際にも行われていた。まとめとして、ゲストティーチャーによる全体評価と、スライドでの学習内容の振り返りの後、課題についての考えを個人で記入し、発表した。

研究協議では、「ゲストティーチャーとの対話で、生徒の知的好奇心がとても高まっていた」「一つの資料から考えることで、生徒は具体的場面を根拠に、課題について多角的に考察していた」との意見が出た一方、「教師と生徒とのやり取りが多く、生徒同士の学び合う場面がもっとあってもよかった」「生徒の思考をさらに深めるために、課題の吟味と学習場面の設定が必要だった」との意見が出た。今回の授業で、「本物と出会うこと」によって、生徒の思考をさらに深めることを実感した。今後も、授業実践・分析の研修を通じて、部員同士が学び合うことで、授業力のさらなる向上を目指していきたい。

市川 義浩 (小・津沢中)

## 富山市中教研社会部会・活動報告

(8月17日：市中教研社会科部会現地研修)

富山市中教研社会部会では、富山県立イタイイタイ病資料館において、現地研修会を実施した。

イタイイタイ病資料館では、学芸員の方による説明と資料館の見学、映像資料の視聴、そして「語り部」の小松雅子さんから講話をしていただいた。

患者であった小松さんの祖母の病状や苦しみ、差別や偏見、イタイイタイ病対策協議会の会長を務めておら



れたお父様のご苦労等について、生々しくも貴重な経験、そして現在の想いをお聴きすることができた。

展示室では、①神通川とともにあった暮らしの原風景②イタイイタイ病の発生と被害の実態③原因究明、健康と暮らしを守る動き④流域住民の健康を守り、患者を救う⑤美しい水と大地を取り戻してきた環境被害対策⑥環境・エネルギー先端県の実現をめざして、の順に、被害の発生から現在までの動きを時間の流れに沿って紹介していただき、大変有意義な研修となった。

イタイイタイ病は、四大公害病として、地理・歴史・公民の三分野で学習する。富山県で起きた悲惨な公害の実態、患者や家族の方々の苦しみ、裁判での闘い、そして被害の克服に向けた長年にわたる努力を、生徒たちが富山県民として、しっかりと学び考えていくことができるよう、私たち自身が意識して授業に活かしていかなければならないと改めて考えさせられた。



山田 智子 (富・岩瀬中)